



# アザメ新聞 (号外8)

平成18年2月6日発行

## 国際湿地シンポジウム2006が滋賀県で開催! 日本そして世界各国から先進事例を発表 <アザメの瀬も事例を報告>

日本や世界各国から研究者・環境団体・行政らが集まり、湖沼や河川など水辺の自然再生について論議する「国際湿地再生シンポジウム2006」が1月28（土）～29日（日）に、滋賀県大津市（大津プリンスホテル）で滋賀県や国、NGO（非政府組織）「ラムサールセンター」（本部・東京）などが主催で開催されました。

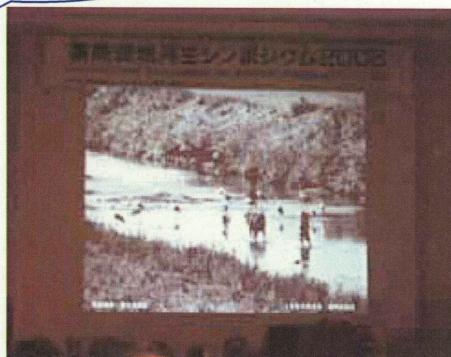
初日は、湿地研究の第1人者、米国オハイオ州立大のウイリアム・ミッチ教授、ラムサールセンター事務局長やコウノトリで有名な兵庫県豊岡市長らの基調講演の他、国内外の先進的な事例などを紹介する講演が行われました。

また、翌日は、生物の多様性や地域社会とのかかわり、湿地再生の技術などテーマ別に第1分科会～第4分科会（全45課題）に分かれ、各分科会ごとに国内外の事例報告が行われました。

報告課題の内、第4分科会において「アザメの瀬自然再生事業における順応的整備」と題し、尾澤事務所長（武雄河川事務所）の事例報告が行われました。また、第1分科会において、東京大学よりアザメの瀬を事例に「トンボを対象とした氾濫原湿地再生における目標種選定方法の検討」と題し報告が行われました。



国際湿地再生シンポジウム会場  
※会場では、同時通訳が行われていました



豊岡市長の発表  
※円山川の昔の風景 (コハトリがいる様子)

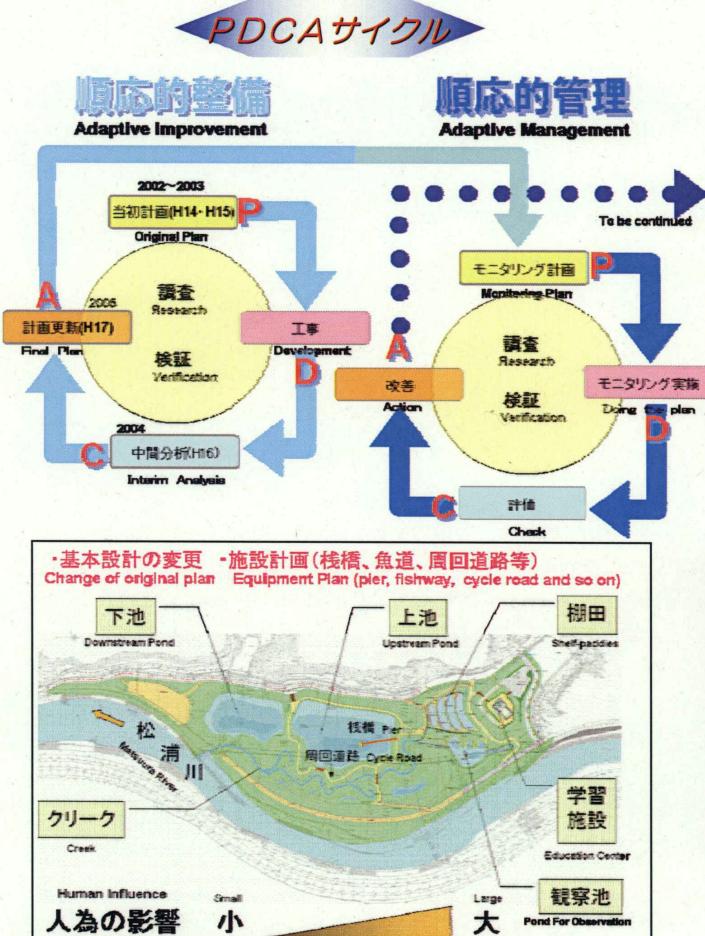


尾澤事務所長の発表 (第4分科会)  
※報告名：アザメの瀬自然再生事業における順応的整備



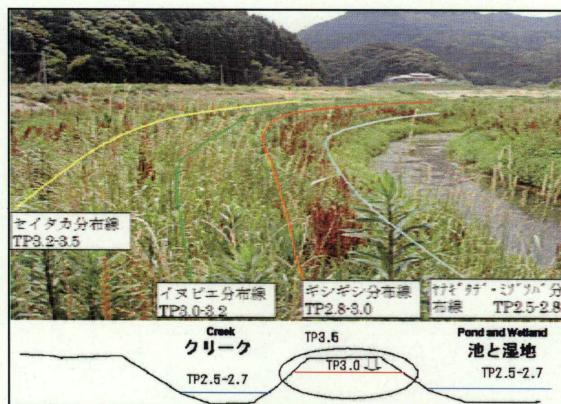
東京大学 角谷氏の報告 (第1分科会)  
※報告名：トンボを対象とした氾濫原湿地再生における目標種選定方法の検討

## 国際湿地再生シンポジウム2006 第4分科会で発表した主な内容



● PDCAサイクルを用いた整備  
 平成14~15年度の当初計画に対し、平成16年度に中間分析を行い、観察池・棚田と上池の工事を行う平成17年度（主な工事の最終年度）の工事着手前に計画を更新。

当初計画（Plan）、工事（Do）、中間分析（Check）、計画更（Action）のPDCAサイクルを用いた整備を行い、工事終了後はモニタリングによる検証を行いながら順応的管理（洪水攪乱や植生の遷移などによる自然環境の変化も考慮し、PDCAサイクルの継続）を行っていきます。



- 1) 掘削工事後の最終形（基本的な形）
  - ・クリークの河岸の地盤高をT.P.3.0mまで下げる
  - ・町道側の法面勾配を大きくする
  - ・町道側の法面や池周辺、本川側湿地にヤナギの植樹を行う
  - ・シードバンクは早期の植生回復に利用する（法面）
- 2) エコロジカルネットワークの確保
  - ・棚田や観察池とクリークの間に木製の簡易魚道を設置する
- 3) 管理方針（基本方針として上流から下流へ徐々に人為の影響をなくす）
 

上池は、上流側から桟橋を出すなど上流側に学習機能をもたせ、人為的な管理も下流側へ行くほど少なくする。なお、下池は、人為的な管理をせず自然に任せ、上池に対するリファレンスとする。また植生の管理方針は、最終形ができるからモニタリングをしながら決定する
- 4) 環境学習
  - ・地元のアザメの会による環境学習や河川技術者の研修フィールドとしての活用
- 5) モニタリング
 

本川とアザメの瀬との河川環境と氾濫原の環境の違いを比較できるモニタリングを行う
- 6) 課題
  - ・クリークの水量不足によるクリークの水質、底質が悪化
  - ・湿性の外来種が繁茂している
  - ・ヤナギや湿性外来種の繁茂によりクリーク部の埋没の懸念がある
  - ・植生の繁茂により池とクリークの連続性が欠如してきた
  - ・ブラックバスやブルーギルなど外来種が侵入している
- 7) 課題への対応（現時点で対応方針が決まったもののみ）
  - ・木杭や木柵による低水路の確保を行い植生管理。また、池とクリークの連続性も木杭や木柵により水路確保を行う。なお、下池のキシュウスズメノヒエは、そのままにしておく（トンボや稚魚の生息環境として残す）